

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 } 殿福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和 8 年度病虫害発生予報第 6 号 (9 月) について

このことについて、病虫害発生予報第 6 号を発表したので送付します。

予報第 6 号

ハダニ類の発生状況に注意しましょう

本年は高温と乾燥傾向が続き、ハダニ類の増殖に好適な条件となっています。これに伴い、各作物でハダニ類が目立ち始めたほ場が多くなっています。

ハダニ類は増殖が速いので、発生を確認したら直に対策を取りましょう。気門封鎖剤を活用したローテーション防除が重要です。また、高温となる日中の防除は薬害の恐れがありますので、涼しい時間帯に行いましょう。



図 1 イチゴ葉上のナミハダニ



図 2 チャ葉上のカンザワハダニ

< 予想される向こう 1 か月の天候 (令和 8 年 8 月 22 日～9 月 21 日) >

暖かい空気に覆われ気温の高い状態が続いています。今後も気温の高い状態が続く見込みで、向こう 1 か月の気温は高いでしょう。高気圧に覆われやすく湿った空気の影響を受けにくいため、晴れの日が多く、向こう 1 か月の降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いでしょう。

向こう 1 か月の気温・降水量・日照時間 (数値は予想される出現確率)

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低10 並20 高70% 高い見込み	少40 並40 多20% 平年並か少ない見込み	少20 並40 多40% 多い見込み

(福岡管区气象台 令和 8 年 8 月 20 日発表 1 か月予報より抜粋)

9月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現況 (発生量)	9月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
水稻 (普通期)	いもち病	並	並	並
	紋枯病	少	やや少	やや少
	トビイロウンカ	少	少	並
	イネカメムシ	多	多	並
	斑点米カメムシ類	やや多	やや多	並
大豆	ハスモンヨトウ	並	やや多	やや多
	吸実性カメムシ類	多	多	並
かんきつ	黒点病	やや少	やや少	並
	ミカンハダニ	やや少	並	並
かき	炭疽病	やや少	やや少	やや少
	フジコナカイガラムシ	少	少	並
	ハマキムシ類	やや多	やや多	並
果樹共通	果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ他)	多 ³⁾	— ³⁾	多 ³⁾
イチゴ (育苗期)	炭疽病	並	並	並
	ハダニ類	やや多	やや多	やや多
アスパラガス	斑点性病害(斑点病・褐斑病)	並	— ⁴⁾	並
	アザミウマ類	少	— ⁴⁾	やや少
野菜共通	ハスモンヨトウ	並	やや多	やや多
	オオタバコガ	並	並	並
	コナジラミ類	並	やや多 ⁵⁾	やや多
茶	炭疽病	やや少	並	並
	もち病	並	並	並
	カンザワハダニ	並	やや多	やや多
	チャノコカクモンハマキ	少	やや少	やや少
	チャノホソガ	少	やや少	やや少
	チャノキイロアザミウマ	並	並	並
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	並	並
	チャトゲコナジラミ	並	並	並

注1) 予報の発生量は、平年および前年と比較を「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

それぞれの条件は、少発生(－)、やや少発生(－～±)、並発生(±)、やや多発生(±～＋)、多発生(＋)として示し、＋を総合的に判断して発生量を予想しています。

注3) 果樹共通・果樹カメムシ類の発生量は、年次間変動が大きいため、前年比としています。

注4) アスパラガスの調査は2024年から開始されたため、平年値がなく、前年比を記載しています。

注5) 野菜共通・コナジラミ類では各地点の調査開始～2025年までの平均値を平年としています。

【普通作物：水稻】

1 いもち病（葉いもち）

（1）予報の内容

発生量：平年・前年並

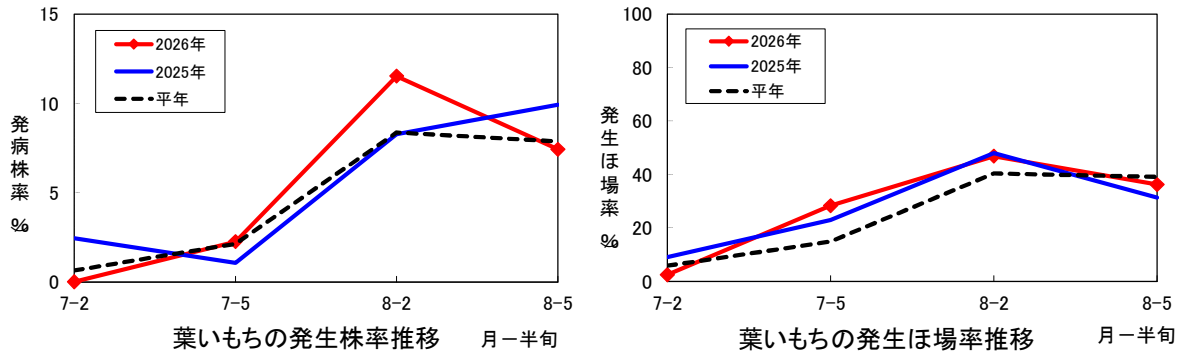
（2）予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、葉いもちの発生量は平年並であった（±）。

（葉いもち）発病株率 7.4%（平年 7.9%、前年 9.9%）

発生ほ場率 36.2%（平年 39.0%、前年 31.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



（3）防除上注意すべき事項

ア 使用農薬は「令和8年度普通作物病害虫・雑草防除の手引き」を参照する。

イ 農薬の使用および散布等にあたっては、最終頁の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

2 紋枯病

（1）予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

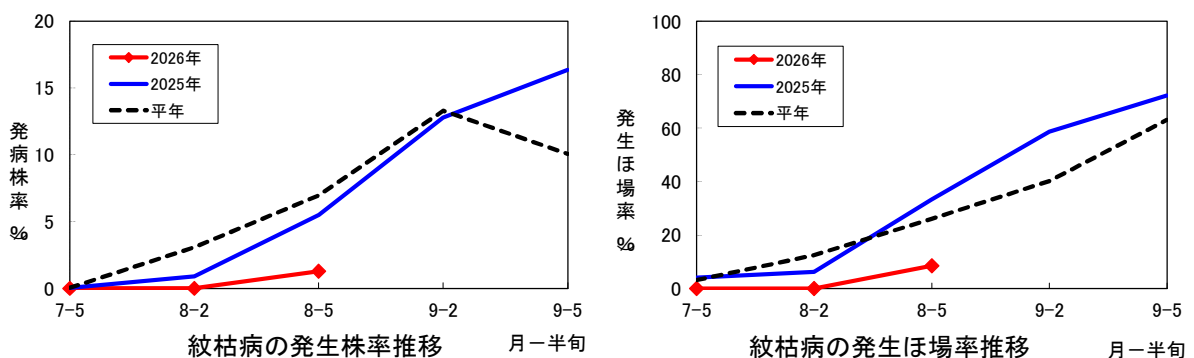
（2）予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は少なかった（－）。

発病株率 1.3%（平年 7.0%、前年 5.5%）

発生ほ場率 8.5%（平年 26.1%、前年 33.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



（3）防除上注意すべき事項

ア 密植や多肥栽培ほ場、昨年多発した場などでは発病しやすい傾向があるため、発病が認められたら早めに防除を行う。

イ 出穂期以降、病斑の上位進展が認められる場合は補正防除を行う。

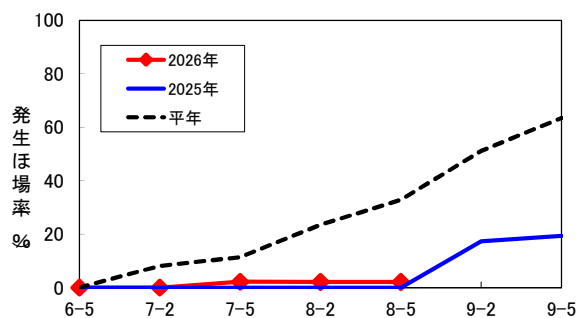
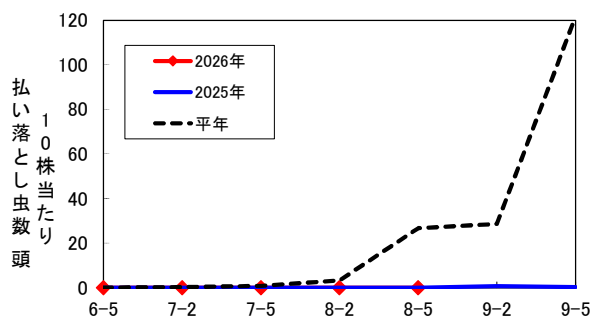
3 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。
 10株当たり払い落とし成幼虫数 0.01頭（平年 26.6頭、前年 0頭）
 発生ほ場率 2.1%（平年 32.8%、前年 0%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、並発生条件となっている（±）。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本種は、地域及びほ場による発生の差が大きく、世代を経るごとに急激に増加する。ほ場における発生状況を把握し、発生が多い場合は幼虫期に防除を行う。

【福岡県の要防除水準（払い落とし調査によるトビイロウンカ中老齢幼虫の合計数）】

飛来後第2世代 : 100株当たり 100頭以上

9月末 : 100株当たり 1000頭以上

- イ 出穂後は薬剤が株元まで到達しにくくなるため、株元に確実に届くよう丁寧に散布する。

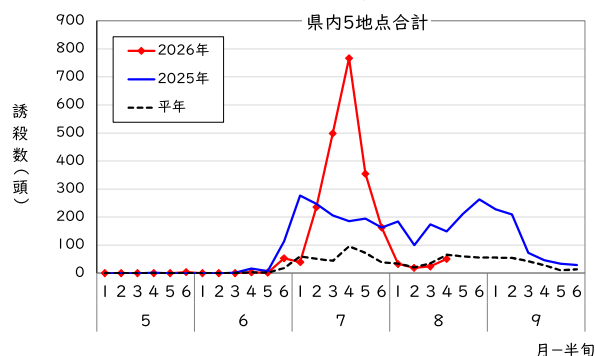
4 イネカメムシ（※令和8年7月29日付け注意報第3号（斑点米カメムシ類）を参照）

(1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年並

(2) 予報の根拠

- ア 県内5か所の予察灯（筑紫野市、糸島市、遠賀町、みやま市、荏田町）における5月1半旬～8月4半旬までの誘殺数は、平年より多かった（＋）。
 イネカメムシ 2,247頭（平年 384.7頭、前年 2,018頭）



予察灯におけるイネカメムシの誘殺数の推移

- イ 県南部の予察灯および水稻ほ場でも確認されており、発生地域が拡大している。

- ウ 向こう1か月の気象予報では、並～やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。
- イ イネカメムシは出穂直後から本田へ飛来して吸汁加害するため、他の斑点米カメムシ類の防除適期と異なるので注意する。イネカメムシの防除適期は出穂期とその7～14日後である。また、周囲より出穂が早いほ場では出穂期に集中的に加害を受けると不稔穂が発生し、収量に影響するため注意する。

5 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

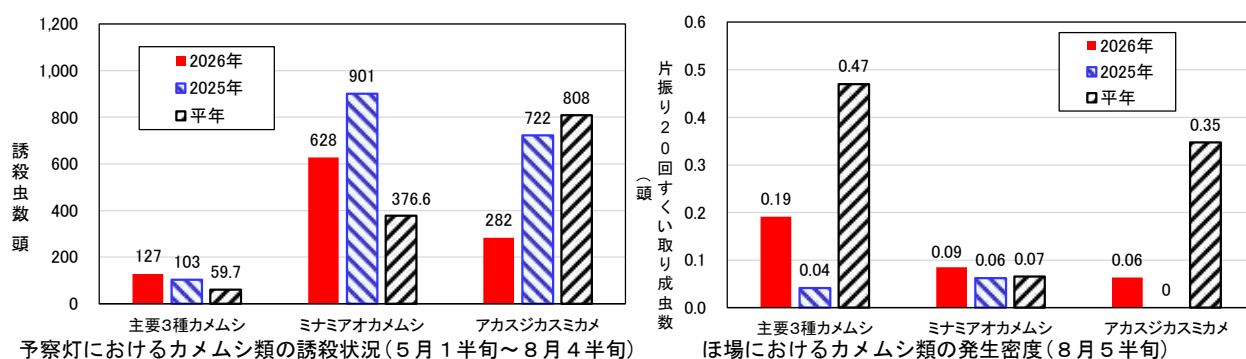
ア 県内5か所の予察灯（筑紫野市、糸島市、遠賀町、みやま市、荏田町）における5月1半旬～8月4半旬の誘殺数は平年より多かった（+）。

- ・主要3種カメムシ（クモリカメシ、ホリカメシ、シロホカメシ）127頭（平年 59.7頭、前年 103頭）
- ・ミナミアオカメムシ 628頭（平年 376.6頭、前年 901頭）
- ・アカスジカスミカメ 282頭（平年 722.2頭、前年 808頭）

イ 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

- ・主要3種カメムシ（クモリカメシ、ホリカメシ、シロホカメシ）
20回すくい取り虫数 0.2頭（平年 0.5頭、前年 0.1頭）
発生ほ場率 6.4%（平年 18.3%、前年 4.2%）
- ・ミナミアオカメムシ
20回すくい取り虫数 0.1頭（平年 0.1頭、前年 0.1頭）
発生ほ場率 8.5%（平年 3.3%、前年 6.3%）
- ・アカスジカスミカメ
20回すくい取り虫数 0.1頭（平年 0.4頭、前年 0頭）
発生ほ場率 2.1%（平年 8.2%、前年 0%）

ウ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。



(3) 防除上注意すべき事項

ア イネカメムシを除く斑点米カメムシ類の防除時期は穂揃い期とその7～10日後の2回である。ほ場での発生状況に留意し、発生が多い場合は薬剤防除を行う。

イ カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。

【普通作物：大豆】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年よりやや多

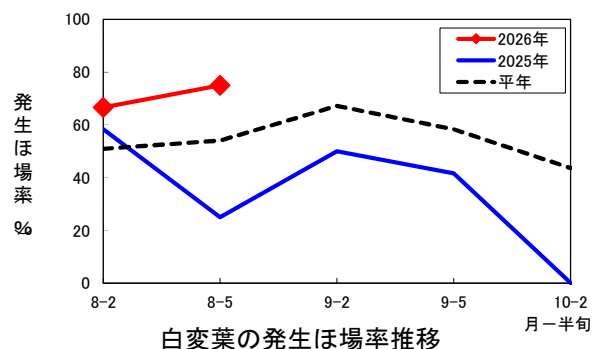
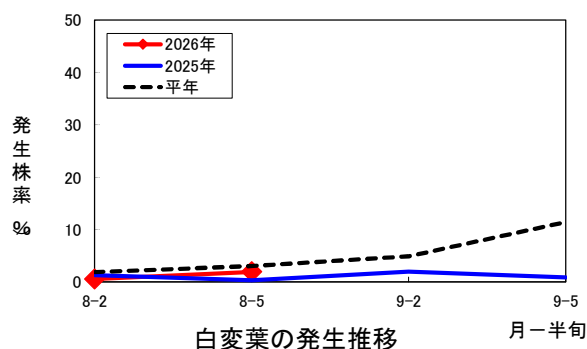
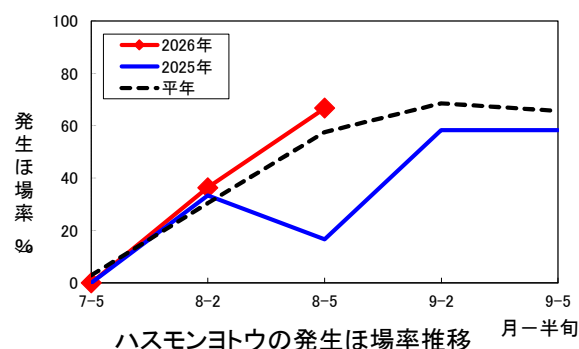
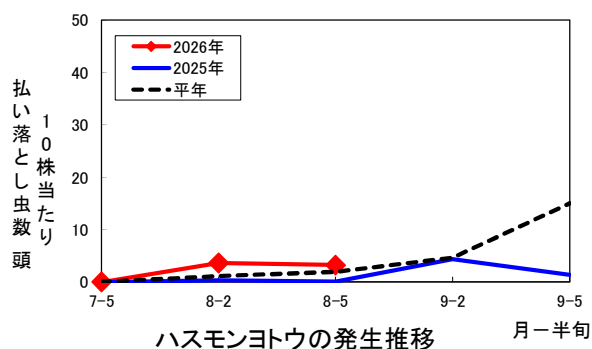
(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並（±）。

10株当たり払落とし幼虫数 3.2頭（平年 2.0頭、前年 0.1頭）
発生ほ場率 66.7%（平年 57.5%、前年 16.7%）

イ 8月5半旬調査の結果、白変葉の発生量は平年並（±）。

白変葉発生株率 2.0%（平年 3.1%、前年 0.3%）
発生ほ場率 75.0%（平年 54.1%、前年 25.0%）

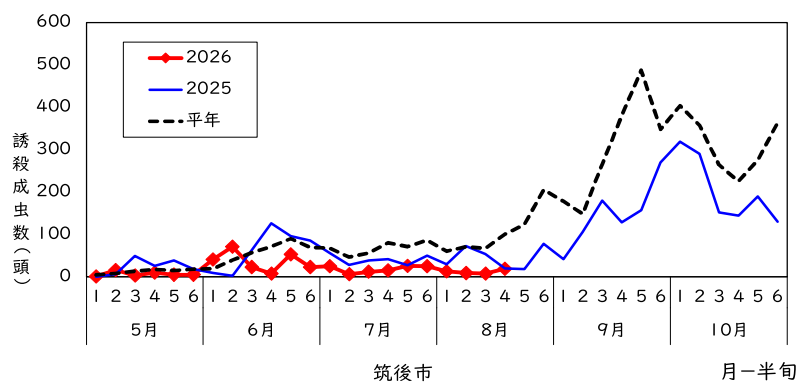
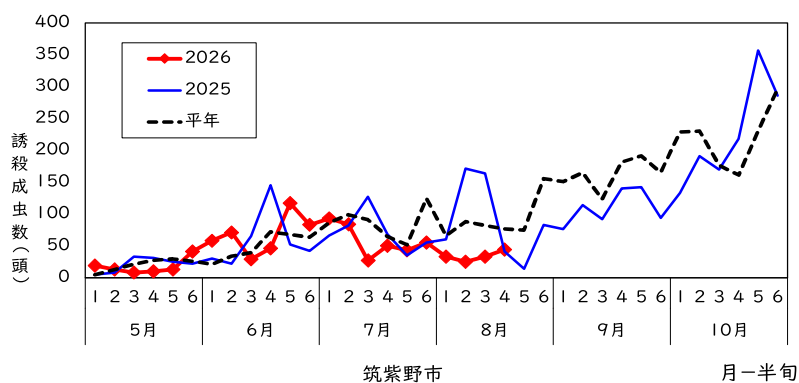


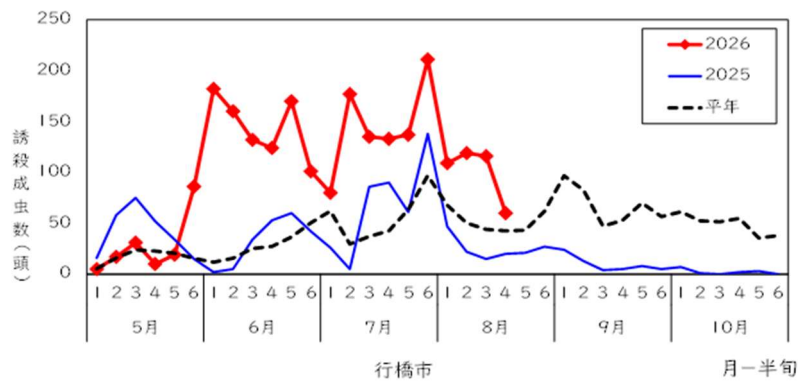
ウ 県内3か所のフェロモントラップ（筑紫野市、筑後市、行橋市）における8月1半旬～4半旬の誘殺成虫数は、3地点中2地点が平年より少なく推移し（－）、行橋市では平年より多く推移した（＋）。

筑紫野市 135頭（平年 312.2頭、前年 436頭）

筑後市 49頭（平年 299頭、前年 177頭）

行橋市 404頭（平年 204.7頭、前年 104頭）





フェロモントラップにおけるハスモンヨトウの誘殺数

エ 向こう1か月の気象予報では、多発の条件となっている(+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページのフェロモントラップ誘殺データを参照する。

<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo-doukou.html#daizu-yasai>

イ 食害による減収量が大きいのは開花期7～20日頃(8月下旬～9月上旬)であるので、この時期の防除が重要である。この時期に白変葉が多い場合は直ちに防除を行う。

ウ フェロモントラップの誘殺数が急増したら、ほ場のハスモンヨトウや白変葉の発生状況を観察して防除の要否を決定する。

エ 一部の薬剤で、薬剤感受性の低下が懸念されることから、薬剤の選定に留意する。

2 吸蜜性カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年並

(2) 予報の根拠

ア ミナミアオカメムシの県内5か所の予察灯(筑紫野市、糸島市、遠賀町、みやま市、荻田町)における5月1半月～8月4半月の誘殺数は平年より多かった(+)。

誘殺数 628頭(平年 376.6頭、前年 901頭)

イ 8月5半月調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

- ・ミナミアオカメムシ・アオクサカメムシ

10株当たり払落し虫数 0.17頭(平年 0.05頭、前年 0.03頭)

発生ほ場率 8.33%(平年 5.15%、前年 8.33%)

- ・ホソヘリカメムシ

10株当たり払落し虫数 0.07頭(平年 0.03頭、前年 0.13頭)

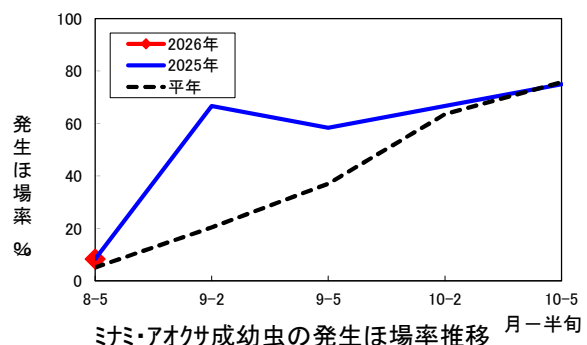
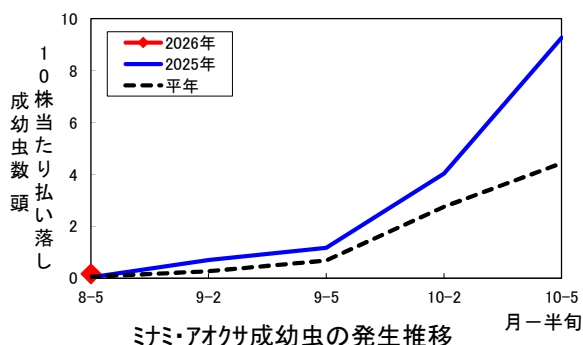
発生ほ場率 8.33%(平年 6.73%、前年 25%)

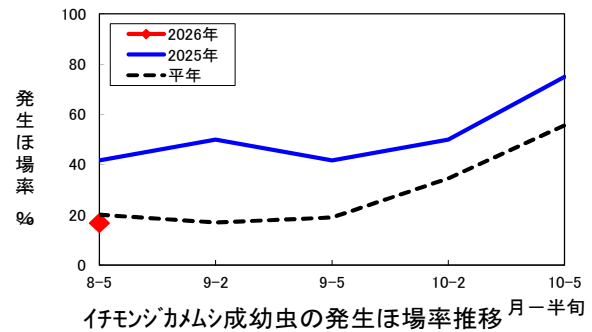
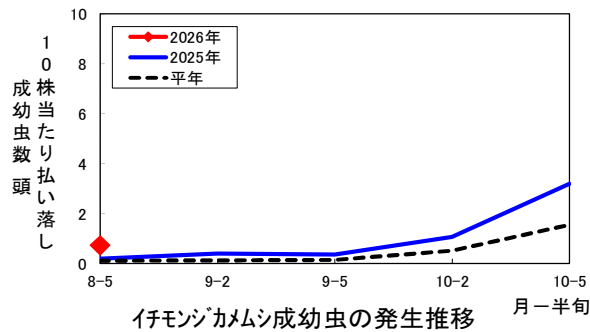
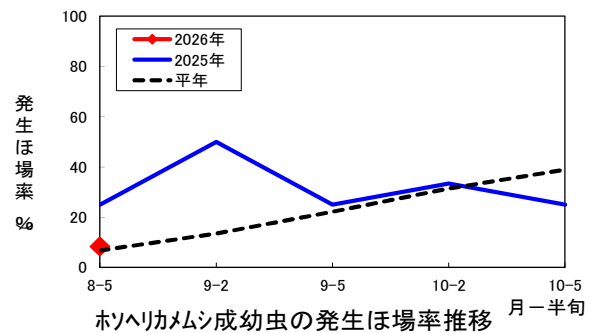
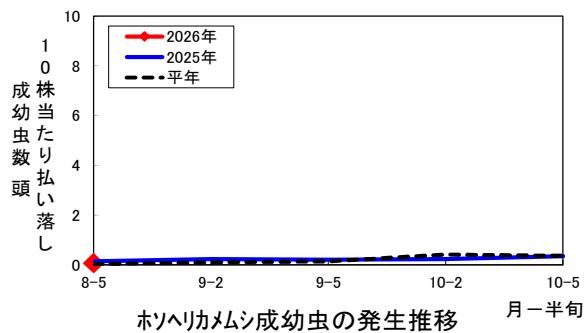
- ・イチモンジカメムシ

10株当たり払落し虫数 0.73頭(平年 0.12頭、前年 0.20頭)

発生ほ場率 16.7%(平年 20%、前年 41.7%)

ウ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生条件となっている(±～+)。





(3) 防除上注意すべき事項

- ア 防除適期は開花期後 30 日前後（例年 9 月中～下旬）であるが、多発生の場合はその 7～10 日後に 2 回目の防除を行う。
- イ カメムシ類は収穫時まで子実被害が続くため、発生初期の防除を心掛ける。
- ウ カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除の効果が高い。

【果樹：かんきつ】

1 黒点病

(1) 予報の内容

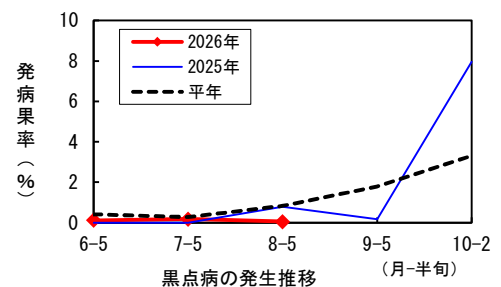
発生量：平年よりやや少なく、前年並

(2) 予報の根拠

- ア 8 月 5 半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。
発病果率 0.05%（平年 0.84%、前年 0.79%）
発生ほ場率 18.2%（平年 30.1%、前年 36.4%）
- イ 向こう 1 か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（－～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出し処分する。



2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

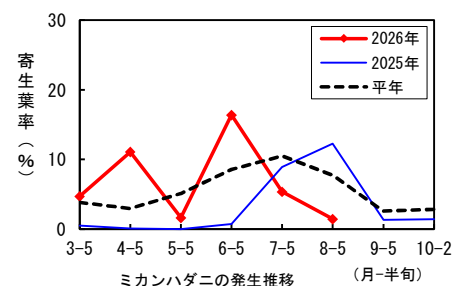
発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 8 月 5 半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。
寄生葉率 1.5%（平年 7.8%、前年 12.3%）
発生ほ場率 27.3%（平年 52.6%、前年 63.6%）
- イ 向こう 1 か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。また、薬剤感受性の低下



を避けるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量はやや少なかった（－～±）。

発病枝率 0.09%（平年 0.30%、前年 0.85%）

同 発生ほ場率 9.1%（平年 17.3%、前年 45.5%）

発病果率 0%（平年 0.11%、前年 0.06%）

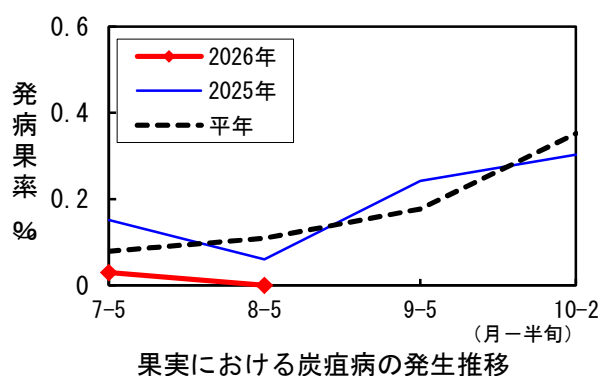
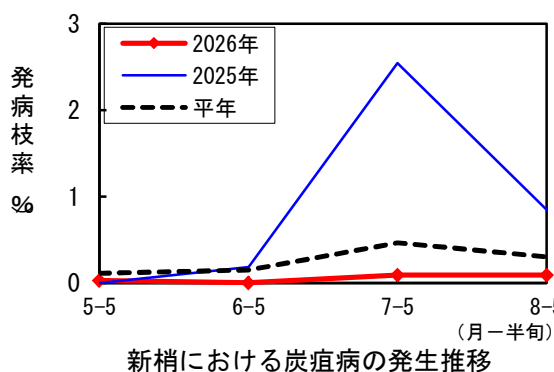
同 発生ほ場率 0%（平年 14.5%、前年 18.2%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少ない発生の条件となっている（－～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果、台風等による傷果は見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ 降雨が続いた場合や、前年発生が多かった園や、日焼け果の多発園では、薬剤防除を徹底する。



2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

寄生果率 0.2%（平年 5.2%、前年 0.4%）

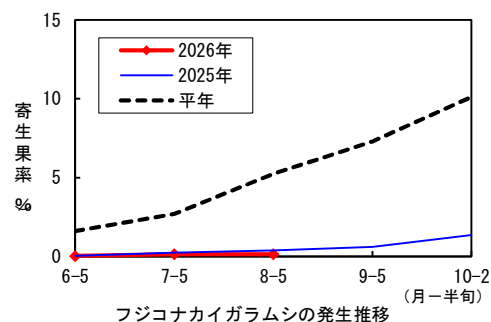
発生ほ場率 18.2%（平年 67.1%、前年 54.5%）

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除に当たっては、天敵への影響が比較的少ない

薬剤を選択する。なお、果樹カメムシ類の防除等でやむを得ずフジコナカイガラムシの天敵に影響のある薬剤を使用する際は、リサージェンスが起こる可能性があるのでフジコナカイガラムシにも効果のある薬剤を選択する。

イ 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、混み合った枝を整理するとともに、散布むらがないよう十分量の薬液を丁寧に散布する。



3 ハマキムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～＋）。

被害果率 1.4%（平年 0.7%、前年 2.1%）

発生ほ場率 72.7%（平年 47.0%、前年81.8%）

イ 第2～3世代と考えられる7月1半旬～8月5半旬のフェロモントラップによる雄成虫誘殺数は、平年並～やや少なかった（－～±）。

誘殺数：チャノコカクモンハマキ <うきは市> 282 頭（平年 296 頭、前年 456 頭）

<八女市> 227 頭（平年 596 頭、前年 492 頭）

：チャハマキ

<うきは市> 0 頭（平年 4.1 頭、前年 1 頭）

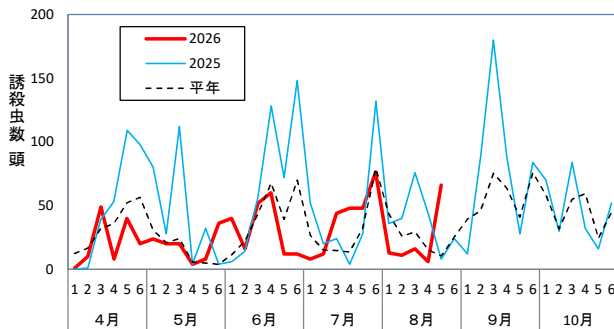
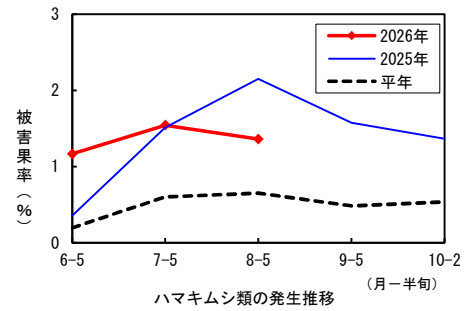
<八女市> 7 頭（平年 28 頭、前年 0 頭）

ウ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

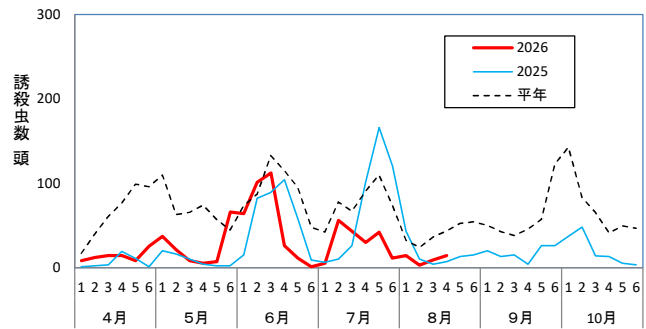
(3) 防除上注意すべき事項

ア ハマキムシ類は世代数が多く発生期間が長いため、卵から成虫まで多様な齢期の個体が混発している。園内の発生状況を確認し、発生が多い園では成虫の発生時期と量に注意し、発蛾最盛期から7～10日後の若齢幼虫期に防除するように努める。

イ 幼虫は葉と葉が重なった部分や、ヘタと果実の間に多く潜んでいるため、散布むらがないよう十分量の薬液を丁寧に散布する。



チャノコカクモンハマキ(うきは市)



チャノコカクモンハマキ (八女市)

フェロモントラップにおけるチャノコカクモンハマキの誘殺数

【果樹共通：果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシ他）】

(1) 予報の内容

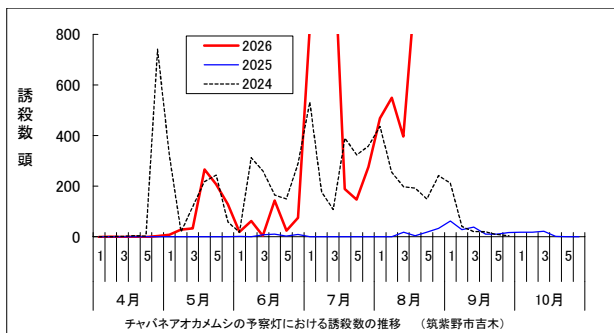
発生量：前年より多く、多発生した一昨年並、過去10年間との比較ではやや多

果樹園飛来時期：筑後地域以外は、ヒノキ樹からは既に離脱している

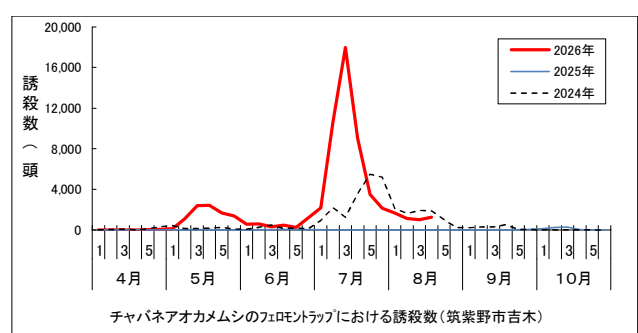
(2) 予報の根拠

ア 県内各地の予察灯・フェロモントラップによる誘殺数は多かった（＋）。

※ 筑紫野市以外の地域の詳細他、下記ホームページのデータも参照



チャバネアオカメムシの予察灯における誘殺数の推移 (筑紫野市吉木)



チャバネアオカメムシのフェロモントラップにおける誘殺数(筑紫野市吉木)

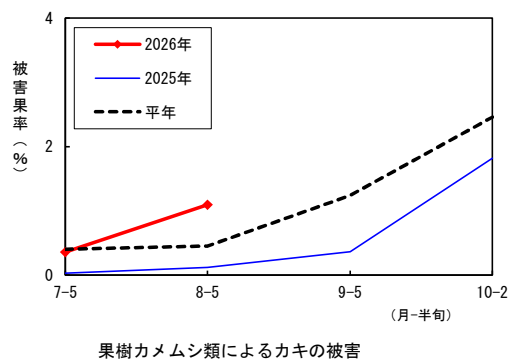
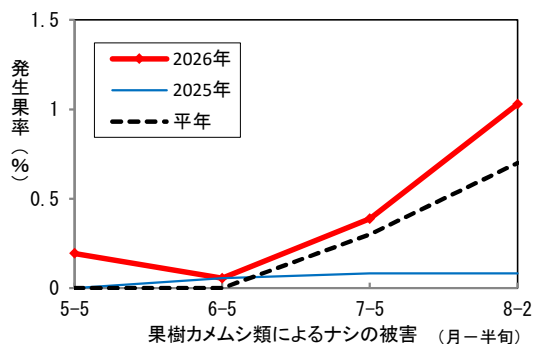
イ 8月2半旬および5半旬調査の結果、なしおよびかきでの被害果率は前年より多く、平年よりやや多かった（±～+）。

なし（8月2半旬）被害果率 1.03%（前年 0.08%、平年 0.55%）

発生ほ場率 54.5%（前年 16.7%、平年 36.2%）

かき（8月5半旬）被害果率 1.45%（前年 0.12%、平年 0.45%）

発生ほ場率 72.7%（前年 27.3%、平年 28.9%）



ウ 8月5半旬のヒノキ球果ビーティングによる果樹カメムシ類の成幼虫捕獲虫数は、前年・平年よりやや少なかった（－～±）。

1 地点当たりの平均捕獲成幼虫数：1.6頭（前年 8.4頭 平年7.7頭）

※ 詳細は下記ホームページのデータも参照

エ 8月5半旬の14調査地点のヒノキ1球果当たりの平均口針鞘数及び被害球果率は、前年より多かった。新世代成虫のヒノキからの離脱予測時期目安（25本）に達するのは前年・平年より早く、筑後地域以外では既に離脱していると考えられる。

1 地点当たりの1球果口針鞘数：21.5本（前年 4.6本）

朝倉地域：25本超/果 久留米地域：25本超/果

筑後地域：12.4本/果 福岡・北九州・筑豊地域：22.8本/果

被害球果率：98.9%（前年 71.9%）

※ 詳細は下記ホームページのデータも参照

オ 向こう1か月の気象予報では、やや多い発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果樹園への飛来時期は地域差が大きく、同一園内でも被害発生状況は偏りがあるため、園内全体を注意して見回り、飛来を認めたら直ちに防除する。予察灯・フェロモントラップ・ヒノキ球果被害果率については、下記ホームページを確認し、最寄りの調査定点のデータを参照。

イ 広範囲に移動するため、薬剤散布は広域一斉防除の効果が高い。

ウ 薬剤防除の際は、収穫前日数等農薬使用基準を遵守する。

エ 降雨があると薬剤の残効が短くなるので、散布間隔に注意する。

オ カイガラムシ類などの天敵に影響のある薬剤を使用する際は、該当する害虫にも効果のある薬剤を選択する。

カ 今後の発生状況等については、病虫害防除所ホームページを参照する。

<<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo-doukou.html#kazyu>>

【野菜：イチゴ（育苗期）】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

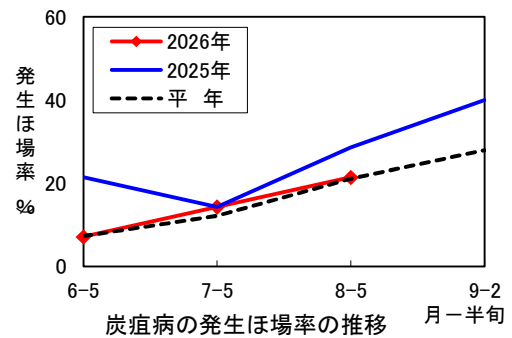
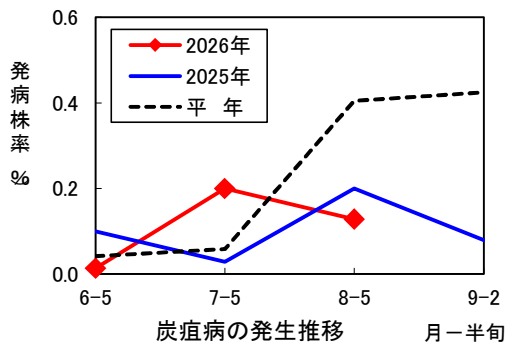
(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病株率 0.1%（平年 0.4%、前年 0.2%）

発生ほ場率 21.4%（平年 21.1%、前年 28.6%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 高温期の激しい降雨や過剰なかん水により、急速に蔓延することがある。ほ場内での発生状況に注意し、発病株や周辺株を速やかに持ち出し処分する。
- イ 育苗床の湿度が高いと発病しやすく、雨媒伝染により感染が拡大するため、苗の間隔を空けて通風を図る。
- ウ 葉かき作業直後や降雨前後を含めて定期的な予防散布を行う。
- エ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。令和7年度病害虫発生予察技術情報第13号（イチゴ炭疽病菌薬剤感受性検定結果）を参照。
<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/attachment/277102.pdf>
- オ 夜冷短日処理や低温暗黒処理を行う場合は、入庫前に生育状況を確認し、健全苗を選抜する。
- カ 入庫前や陽光処理時のかん水は過度にならないように注意する。
- キ 入庫する際は、加湿を避けるために苗を詰めすぎないように注意する

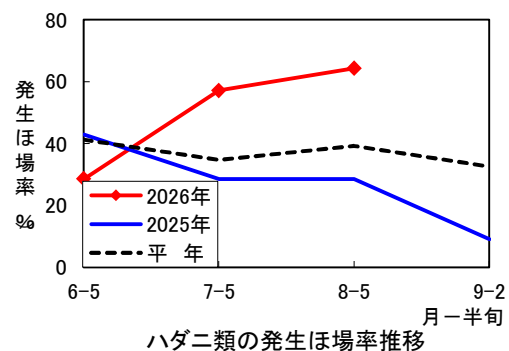
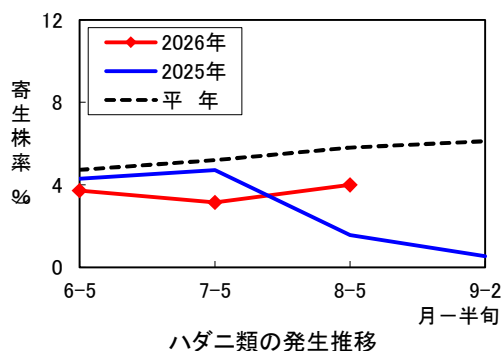
2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～＋）。
寄生株率 4.0%（平年 5.8%、前年 1.6%）
発生ほ場率 57.1%（平年 39.2%、前年 28.6%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。
- イ 多発生条件では防除が困難になるので、初発段階での防除に努める。
- ウ 寄生株は葉かきを強めに行い、寄生葉を取り除くよう努める。なお、摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れて密封し処分する。
- エ 薬剤感受性が低下しやすいため、気門封鎖剤も利用し、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- オ ハダニ類に登録のある薬剤の多くは浸透移行性に乏しいため、葉裏に薬液が十分付着するように丁寧な散布を心掛ける。防除は摘葉後に行うと効果的である。

- カ 夜冷短日処理や低温暗黒処理を行う場合は、入庫前に必ず防除を行い、本ほにハダニ類を持ち込まないようにする。
- キ 化学薬剤だけでは防除が困難であるため、天敵を利用した総合防除を積極的に実施する。
 <県ホームページ掲載の「病害虫・雑草防除の手引き」-「IPMの推進」-「イチゴのIPMマニュアル」参照>https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/805964_62798273_misc.pdf

【野菜：アスパラガス】※2024年度からの調査のため、平年値は無く、前年値との比較。

1 斑点性病害（斑点病・褐斑病）

（1）予報の内容

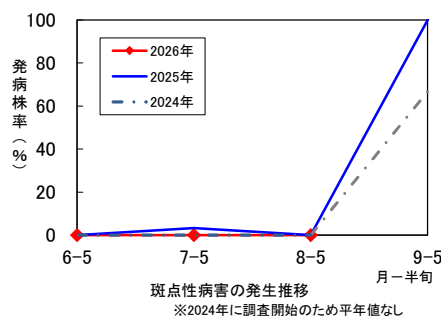
発生量：前年並

（2）予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は前年・前々年並であった（±）。
 発病株率 0%（前年 0% 前々年 0%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（－～±）。

（3）防除上注意すべき事項

- ア 発病茎葉は見つけ次第速やかに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- イ 不要な茎葉は除去、処分し、通風、採光をよくする。
- ウ 多湿にならないように換気に注意するとともに、ほ場の排水対策も心掛ける。
- エ 病勢が進展すると防除が困難になるので、初期防除を徹底する。
- オ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 アザミウマ類

（1）予報の内容

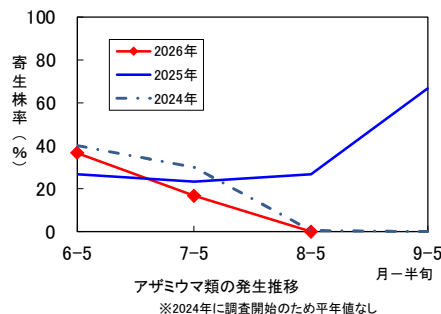
発生量：前年よりやや少

（2）予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は前年より少なく（－）、前々年並であった（±）。
 寄生株率 0%（前年26.7% 前々年0.5%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

（3）防除上注意すべき事項

- ア 多発生条件では防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。また、定期的な薬剤散布を実施する。
- イ 過繁茂は散布むらの要因となるため、不要な茎葉を除去し、処分する。
- ウ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- エ 化学薬剤だけでは防除が困難であるため、除草の徹底や防虫ネットの利用といった総合防除を積極的に実施する。



【野菜：野菜共通】

1 ハスモンヨトウ

（1）予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

（2）予報の根拠

- ア 8月1半旬～4半旬のフェロモントラップにおける誘殺数は、3地点中2地点が平年より少

- なく推移し（－）、行橋市では平年より多く推移した（＋）。〔「普通作物：大豆」の項参照〕。
- イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（＋）。
- （3）防除上注意すべき事項
- ア 地域によって発生量に差があるため、ほ場の発生状況に注意し、発生を確認したら速やかに防除を行う。
- イ 薬剤防除は、若齢幼虫を対象に実施する。
- ウ 今後の発生状況については、病虫害防除所のホームページのフェロモントラップ誘殺データを参照する。＜<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo-doukou.html#daizu-yasai>>

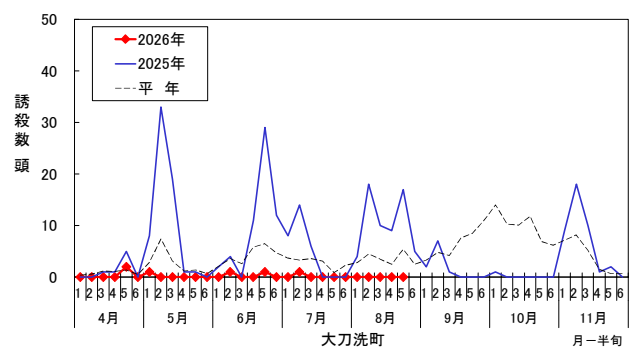
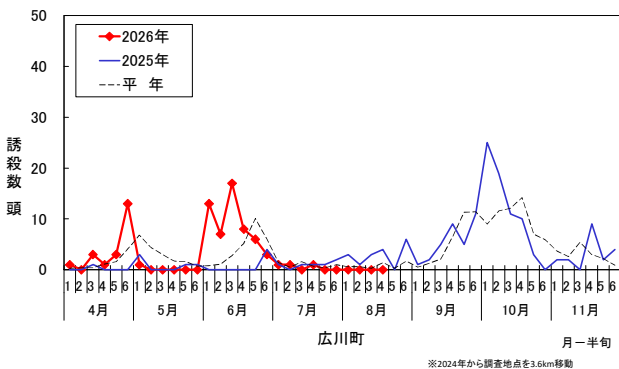
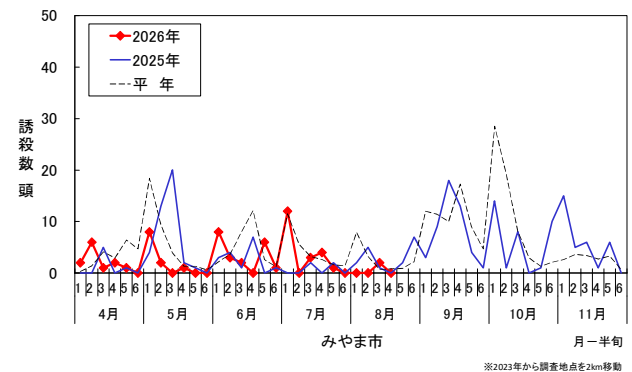
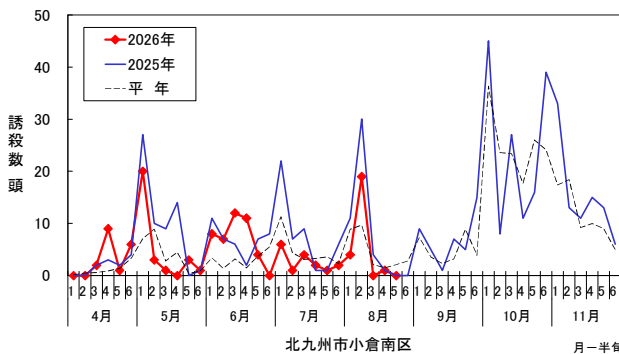
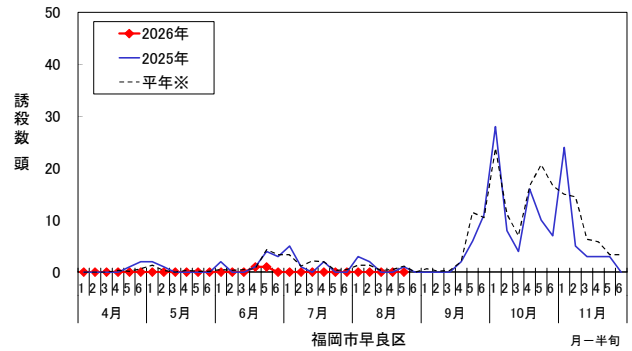
2 オオタバコガ

（1）予報の内容

発生量：平年・前年並

（2）予報の根拠

- ア 7月5半旬～8月4半旬までのフェロモントラップにおける誘殺数は平年並で推移した（±）。
- イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（＋）。



フェロモントラップにおけるオオタバコガの誘殺数

（3）防除上注意すべき事項

- ア 地域によって発生量に差があるため、ほ場の発生状況に注意し、発生を確認したら速やかに防除を行う。
- イ 薬剤防除は、若齢幼虫を対象に実施する。
- ウ 今後の発生状況については、病虫害防除所のホームページのフェロモントラップ誘殺データを参照する。＜<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo-doukou.html#yasai>>

3 コナジラミ類

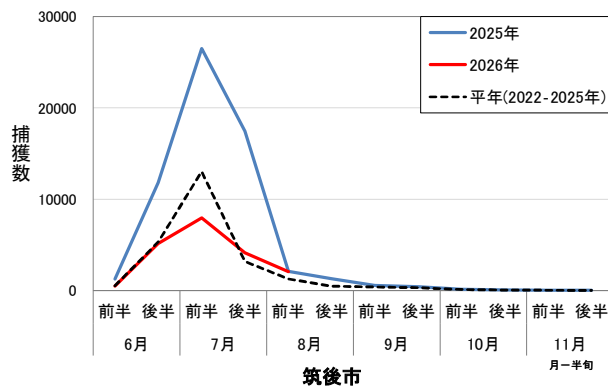
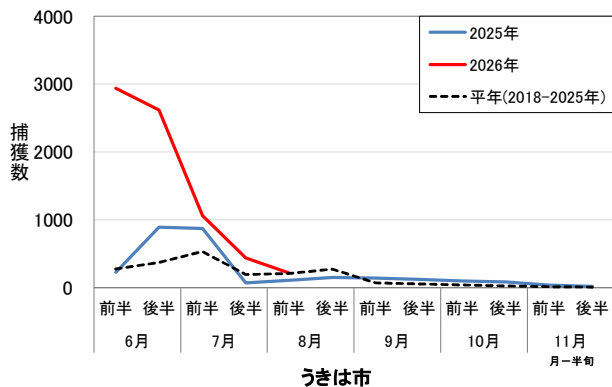
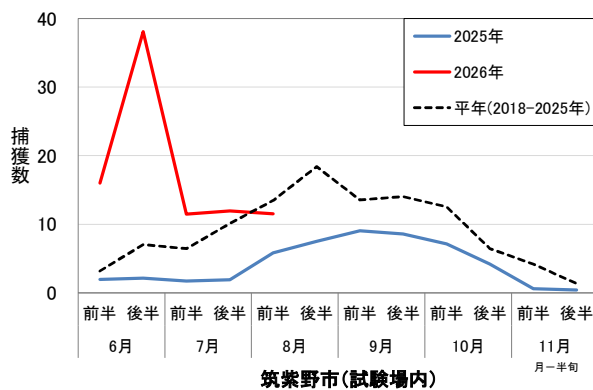
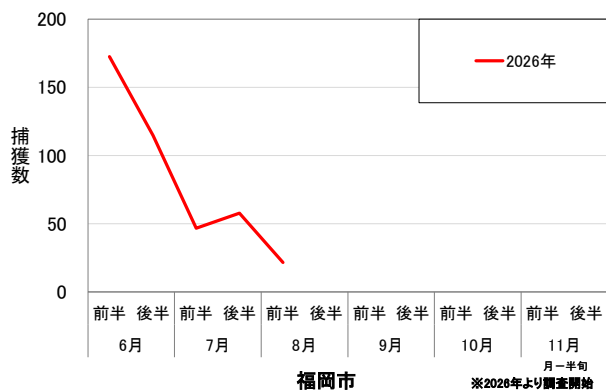
(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月後半～8月前半の粘着板トラップにおける捕獲数は地域によって異なり、一部地域では多発生であったものの、おおむね平年並であった（±）。

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。



黄色粘着板におけるコナジラミ類の捕獲数

注) 冬春トマト栽培施設周囲の東西南北4か所に黄色粘着板を設置

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

イ 施設内への成虫の飛び込みを防止するため、防虫ネットの目合いは0.4mm以下にする。

ウ 黄色粘着板等の設置により発生状況を確認し、初発段階での防除に努める。

エ 苗による持ち込みを防ぐため、育苗時から防除を行い、本ぼへの持ち込みを防ぐ。

オ 栽培終了時はハウスを密閉して蒸しこみ（約50℃で7～10日間程度）を行い、ハウス外への分散を防ぐ。

カ 「入れない、出さない、増やさない」対策を徹底する。

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

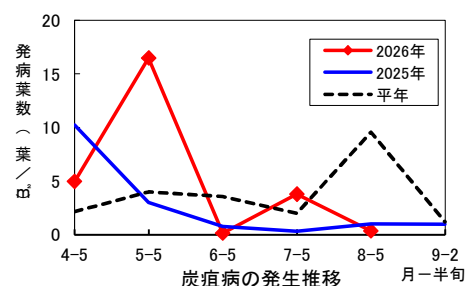
発病葉数 0.3葉（平年 9.6葉、前年 1.0葉）

発病ほ場率 10.0%（平年 59.6%、前年 60.0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少ない発生の条件となっている（－～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 多発園では、秋芽での発生に注意し、4～5葉期の防除を行う。
- イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 もち病

(1) 予報の内容

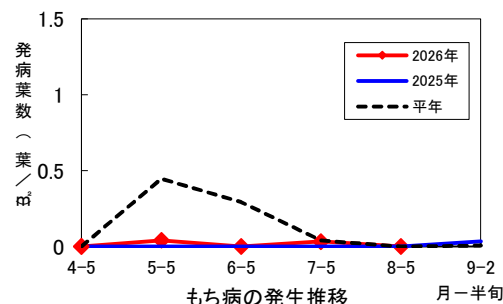
発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。
発病葉数 0葉（平年 0葉、前年 0葉）
発病ほ場率 0%（平年 0%、前年 0%）

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 秋芽生育期に降雨が多いと、感染・発病しやすくなる。
- イ 今年、多発した園では、萌芽期の防除を徹底する。



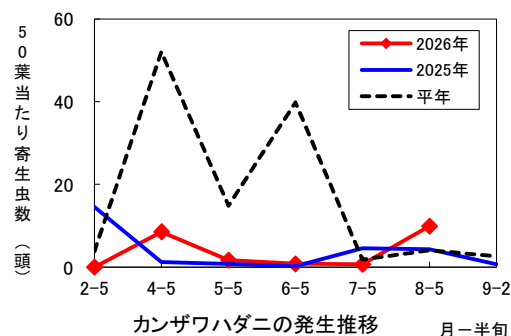
3 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。
50葉当たり虫数 9.9頭（平年 4.1頭、前年 4.3頭）
発生葉率 7.8%（平年 3.1%、前年 3.2%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多い発生の条件となっている（±～+）。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発生状況をよく観察し、発生葉率が2%以上の茶園では、多発する前に速やかに防除を行う。
- イ 多発している園では、効果の高い薬剤を裾葉や葉裏に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。
- ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

4 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

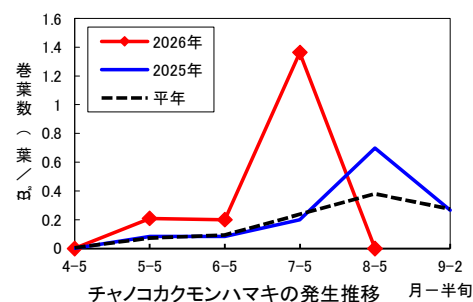
発生量：平年・前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。
1㎡当たり葉巻数 0葉（平年 0.4葉、前年 0.7葉）
発生ほ場率 0%（平年 29.2%、前年 40.0%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多い発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多い時期から7～10日後を目安に防除を行う。
- イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が確認されたら直ちに防除を行うとともに、散布むらがないよう十分な薬量を丁寧に散布する。



5 チャノホソガ

(1) 予報の内容

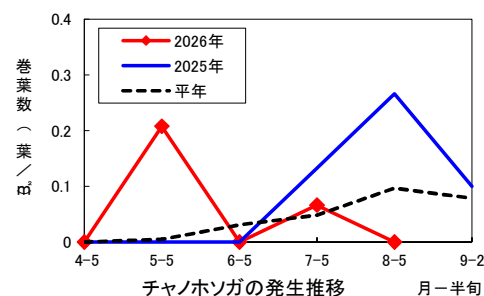
発生量：平年・前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。
1㎡当たり葉巻数 0 葉（平年 0.10 葉、前年 0.27 葉）
発生ほ場率 0%（平年 14.7%、前年 20.0%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多い発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多い時期から7～10日後を目安に防除を行う。
- イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が確認されたら直ちに防除を行うとともに、散布むらがないように十分量の薬量を丁寧に散布する。



6 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

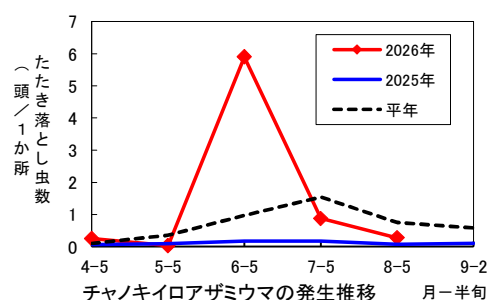
発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。
たたき落とし虫数 0.28 頭（平年 0.75 頭、前年 0.08 頭）
発生ほ場率 40.0%（平年 43.9%、前年 30.0%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多い発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア B5判板上の10回たたき落とし法で、10頭以上見られる場合は防除を行う。



7 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

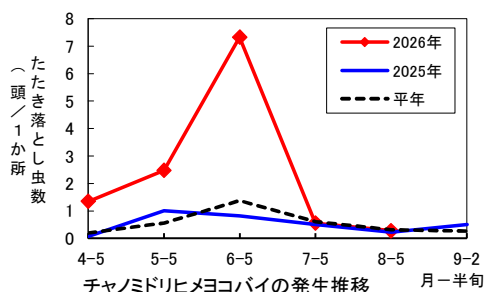
発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。
たたき落とし虫数 0.28 頭（平年 0.31 頭、前年 0.23 頭）
発生ほ場率 60.0%（平年 35.8%、前年 40.0%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多い発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 二番茶期以降は成幼虫が混在するため、発生状況に注意し、
B5判板上の10回たたき落とし法で、4頭以上見られる場合は防除を行う。



8 チャトゲコナジラミ

(1) 予報の内容

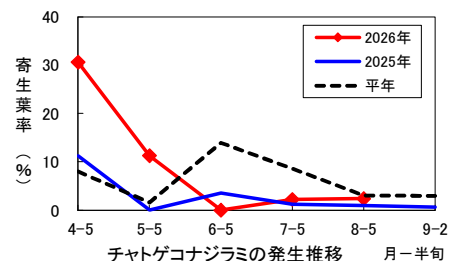
発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。
発生葉率 2.4%（平年 3.0%、前年 1.0%）
発生ほ場率 30.0%（平年 50.3%、前年 30.0%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多い発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア チャトゲコナジラミは年3～4回発生し、防除適期は若齢幼虫期である。このため、発生状況をよく観察し、成虫が最も多い時から14日後を目安に防除を行う。
- イ 幼虫は葉裏に発生しているので、農薬の散布にあたっては、葉裏に十分にかかるように丁寧に散布する。



農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、農薬適正使用の指導を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。農薬を使用する際は、使用者自身の安全確保はもちろん、周囲の人や家畜、隣接する作物、河川等の環境への影響にも十分配慮してください。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。※同一農薬であっても、メーカーによって登録内容が異なる場合がありますので、しっかり確認する。

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として適正に処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

○農薬散布の実施において、周囲の生産者、住民に周知を図る。

3 保護具の着用

○農薬の散布前に、ラベルの注意・警告マークをよく確認する。マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用し、薬液を作成する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。残液は、ほ場外への流出や環境、後作へ影響が生じないように十分配慮し、ほ場内の農作物が植え付けされていない土壌に散布する。

※農薬散布に際しては、残液が出ないように必要な量の散布薬液を準備する。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、地域の農業用廃プラスチック適正処理推進協議会が実施する回収や、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは『廃棄物の処理及び清掃に関する法律（廃掃法）』で禁止されているので、絶対に行わない。

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新しています。発生状況の把握や防除の参考にご活用ください。

○福岡県病害虫防除所のホームページへのアクセス

URL：<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo.html>

または右 QR コード①

○Xのアカウント（福岡県農作物病害虫情報）へのアクセス

URL：https://x.com/PPDPO_Fukuoka または右 QR コード②

①⇒



②⇒

